Ｎｏ．４９３【２０２２年２月１８日配信】
「青森開港＝寛永元年」という考え方はなぜ広まったのか（担当：工藤大輔）

こんにちは！　室長の工藤です。

昨年の秋以降、藩政時代の「青森開港は『いつ』なのか」という主旨の問い合わせが数回きています。その際、まずは「青森開港」って何だろうというその意味を確定しなくてはなりません。すごく大事な点なのですが、ここの理解が共有されないため、いろんな「いつ」が存在してしまうのです。具体的には寛永元年（1624）、同２年、同３年のみっつが示され、青森市民には「寛永元年」がもっとも馴染みがあろうかと思います。

ここで、現在の通説をもとに「青森開港」を説明すると、「弘前藩が太平洋海運に参加するために必要とする『本格的な外浜の開発』を前提とした『青森の町づくり』」ということになります。そしてこの理解に立つと、青森開港＝寛永元年という考え方は成り立ちません。実は、寛永元年という考え方は、そもそも史料的な根拠が極めて乏しい上に、少々極端な言い方をすると青森市内でしか通用しないものなのです。

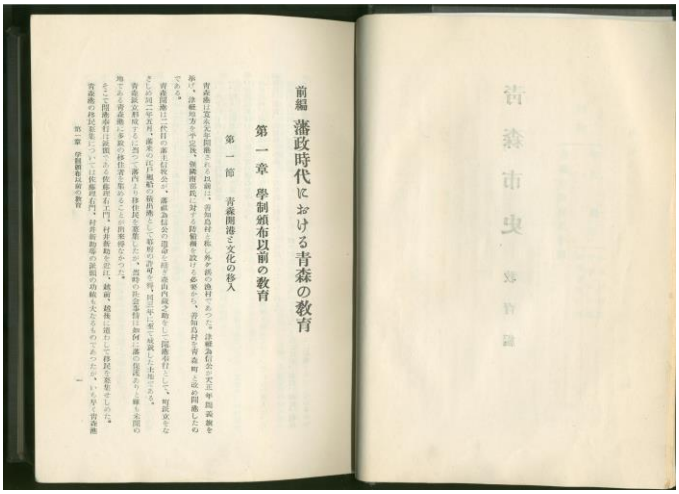
ですから、青森市から離れたところにいる研究者は、「青森開港＝寛永元年」とする考え方が存在するなんてことを知らなかった可能性すらあるのです。

ところで、この考え方は明治 42 年（1909）に示されるのですが、昭和に入ってから認知されるようになります。私はとりわけ、昭和７年（1932）に誕生した研究会青森郷土会の機関誌『郷土誌うとう』の影響が大きかったのではないかとみています。

もちろん、『郷土誌うとう』に研究を発表したすべての研究者が「寛永元年」を支持していた訳ではありません。そのひとり、この研究会の主宰者である肴倉弥八は「寛永２年」を主張していました。ただ、肴倉は自身が編纂委員となり、昭和 29 年に第１巻が刊行となった『青森市史』教育編において「青森港は寛永元年開港される以前は、善知鳥村と称し外ヶ浜の漁村であった」と記し、その後『青森市史』では一貫して「青森開港＝寛永元年」を採用します。これによって、広く市民の間にもこの考えが浸透することになりました。

肴倉は後年、昭和 43 年２月の『東奥日報』インタビュー記事で「青森開港」は「寛永二年です」と語っています。彼の持論は変わっていないのです。しかし、『青森市史』や昭和 28 年発刊の自著『青森市町内盛衰記』では「寛永元年」と記しています。この「使い分け」の理由は分かりません。

ともかく、青森開港＝寛永元年という考え方は、これに異論を唱える研究者が口を閉ざしたことにより一般に広がり定着したとみられるのです。


前編　藩政時代における青森の教育

第一章　學制頒布以前の教育

第一節　青森開港と文化の移入

『青森市史』第一巻 教育編
（青森市　1954 年）